

島崎藤村著「千曲川のスケッチ」を読む

- 小諸義塾(こもろぎじゅく)で考える -

地久節には、私は二、三の同僚と一緒に、御牧が原の方へ山遊びに出掛けた。松林の間などを獵師のように歩いて、小松の多い岡の上では大分蕨を採った。それから鴉窪という村へ引返して、田舎の中の田舎とでも言うべきところで半日を送った。

私は今、小諸の城址に近いところの学校で、君と同年位な学生を教えておる。君はこういう山の上への春が奈何に待たれて、そして奈何に短いものであると思う。四月の二十日頃にならなければ、花が咲かない。梅も桜も李も殆んど同時に開く。城址の懐古園には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、毎年きまりのように風雨がやって来て、一時にすべての花を浚って行ってしまう。私たちの教室は八重桜の樹で圍繞されていて、三週間ばかり前には、丁度花束のように密集したやつが教室の窓に近く咲き乱れた。休みの時間に出て見ると、濃い花の影が私たちの顔にまで映った。学生たちはその下を遊び廻って戯れた。殊に小学校から来たての若い生徒と来たら、あっちの樹に隠れたり、こっちの枝につかまったり、まるで小鳥のように。どうだろう、それが最早すっかり初夏の光景に変わってしまった。一週間前、私は昼の弁当を食った後、四、五人の学生と一緒に懐古園へ行って見た。荒廃した、高い石垣の間は、新緑で埋もれていた。

私の教えている生徒は、小諸町の青年ばかりではない。平原、小原、山浦、大久保、西原、滋野、その他小諸附近に散在する村落から、一里も二里もあるところを歩いて通って来る。こういう学生は多く農家の青年だ。学校の日課が済むと、彼らは各自の家路を指して、松林の間を通り鉄道の路線に添い、あるいは千曲川の岸に随いて、蛙の声などを聞きながら帰って行く。山浦、大久保は対岸にある村々だ。牛蒡、人蔘などの好い野菜を出す土地だ。滋野は北佐久の領分でなく、小島の傾斜にある農村で、その附近の村々から通って来る学生も多い。

ここでは男女が烈しく労働する。君のように都会で学んでいる人は、養蚕休みなどということを知るまい。外国の田舎にも、小麦の産地などでは、学校の収穫休みというものがあるとか。何かの本でそんなことを読んだことがあった。私たちの養蚕休みは、それに似たようなものだろう。多忙しい時季が来ると、学生でも家の手伝いをしなければならない。彼らはまた、少年の時からそういう労働の手助けによく慣らされておる。

P.17 ~ 18

島崎藤村著「千曲川のスケッチ」岩波文庫、岩波書店 1927年10月10日刊

- 2006年9月27日記 -